

木 醉 馬

2 月

本誌二十二年一月二十七日創刊
全社一審二月一日發行
創刊二十二年一月七日開始
第九十六卷 第一號



入日雲魚にかも似て寒をはる

秋櫻子

『残鐘』

二十年四月に戦災に遇い八王子に移ったのだが冬の寒さは
厳しかった。晝橋の上で吹雪に阻まれ傘を持つ手の感覚を失
うこともあったという。それだけに来る春への望みは大きい。
寒明を祝うように魚の形をした大きな雲がゆっくりと流れ
る。孫の光子か千鶴子かと散歩の途次だろうか。「お魚みたい
だねえ」などと話しかけていたかもしれない。よき明日を実
感させるに足る景である。

小野恵美子

流 転

徳田千鶴子



時雨くる朱の寂ゆゆし解脱門

波音の届く谷戸奥鳥総松

土牢に果てゐし皇子や冬の鴟

解脱門抜けしが寒の牡丹かな

冬空の父の深さに溺れけり

考の声母のこゑきく初茜

待つわけでなけど身を寄す茶の花垣

二月集



土瓶蒸

高橋たか子

雁の沼

小森泰子

揃はざる一人を待ちて土瓶蒸
露座仏の額に冬日の止まりぬ
大樽の沢庵さぐる臘八会
満天の星の煌めく冬木の芽
紅梅や城址に遺る天主台

錐揉みに沼へ落ちゆく雁の影
さ牡鹿の群をしたがへ馬柵越ゆる
居間に日の深く差し入る今朝の冬
押し込むや匂あふるる落葉籠
欄干のぬくもりを乞ふ冬の蜂

いかづちを

長谷英夫

いかづちを供に出雲へ神立ちぬ
高々と熊手を掲げ吾子探す
暫くはおんぼひがさよ寒牡丹
地獄絵の奪衣婆動く隙間風
三人征き遺骨なき墓山眠る

冬 苺 藤井明子

琅玕の藪刃めく冬の日矢
無縁仏に触れむばかりの雪婆
二度咲きは慈しむ色風葬跡
言葉なき愛のふかさよ冬苺
銀盤の貴公子冬の薔薇たかく

枯はちす

渡 たみ

僧詫びに大樹の银杏散る畑へ
県境の低き山並み笹子鳴く
笹鳴を追うて山宿一人発つ
両の手に縫る 杉道 朴落葉
捨舟にあまたの雀枯はちす

白 鳥 長谷川祥子

白鳥や孤独の首を寄せ合ひて
手つかずの亡夫の書架や漱石忌
葭枯れて水路きらめく手漕ぎ舟
秋霖や多摩の横山けぶらへる
鳴高音池面に映る山震ふ

久の虫 貞吉直子

あたたかし母の残せし割烹着
買ひ戻る手にのるほどの鏡餅
老いてより見ゆるくさぐさ冬の虫
数へ日や競歩のごとき大通り
干戈なき七十余年や日向ぼこ

冬の蝶 島田万紀子

泥かぶる林檎声なし空青し
冬の蝶草の丈ほど低くとぶ
オレンジ色のポートタワーや聖夜くる
家移り猫寒月を見つめをり
枕辺の分厚き本や風邪癒ゆる

輪中住み 駒井でる太

こちよき築の瀬音や明の春
農に生きて馬齢九十三歳の春
書初の感謝の文字が光りをり
冬満月に強く生きよと励まされ
竹生島見えぬ日淋し時雨空

独楽 植田桂子

子と犬の落葉踏む音遠ざかり
絵本読むところどころに寒鴉
勝独楽を机上に据ゑて次男坊
声の出る地球儀廻す開戦日
遮断機のまた降りる音おでん鍋

風雪十五句

千鶴子選

冬立つや海蝕洞の齒朶明り	小坂優美子
主菓子のくれなる零れ炉をひらく	河野 亘子
散る柳舟より長き水馴れ棹	伊藤 ふみ
手のひらに通草の笑ひこそばゆし	伊東惠美子
念入りに磨く銃身山は雪	小林 千草
一輪はさびしからずや帰り花	馬屋原純子
風花や銃音とよむ谷の底	夏生 一暁
寝そびれし闇ほどきゆく虫時雨	川内谷育代
己が影打つて白鳥立ち上がる	布施 政子
杉山の天のうすずみ時雨くる	緑川 啓子
敗荷へ忽ち風の鏑びゆけり	萩庭 一幹
白息をはげしく糶の始まりぬ	堀田 順子
鬼の子の遊び足らざる夕日かな	能勢 俊子
柴漬の濁すさざなみ鳶の笛	齊藤いさを
今生の明るさを行く枯野行く	齊藤 玲子

馬酔木集

徳田千鶴子 選



母在さば灯点す頃よ白芙蓉
老いし身の風に押さるる秋桜
大根蒔く内海の紺深まりて
降誕祭来るもう履けぬハイヒール

鳴

門 杉田智榮子

僧院の丘や葡萄の枯深み
笹鳴や道半ばてふ神父の碑
木曾谷は柞もみぢに水碓
椽餅や恵那山厚き雲に臥し

東

京 小林 昌子

通草引く全山動く気配して
振り返る妣のぬさうな大花野
素風かな悟りといふはほど遠き
任せるといふも力や雁わたる

熊

本 西川 麻規

抽斗のフラン硬貨や小六月
小菊咲く空家に猫の大欠伸
母の膝取り合うてをり松ぼくり
夫にまだ言へぬことあり竜の玉

京

都 若見 洋子

自己流といふやすらかさ糸編む
探鳥のレンズズームに冬紅葉
間違へし道や冬たんぼぼに遇ふ
北窓を塞ぎ隣人遠くせる

東

京 恩田 洋子

廃れ田の水さびしめり冬雀
御仏を蔵して無住龍の玉
裏木戸でこと足る出入青木の実
婚の荷を降ろす回船小春風

あきる野

米山のり子

馬酔木集 選後反芻

徳田千鶴子

平成から令和への一年。良いことも悪いこともありましたが、
二〇二〇年のオリンピックが、無事に行なわれるのは勿論ですが、どうぞ平和な一
年でありますように。

二〇一九年は自然災害の多い日々でした。

被害地の方々のご苦労、如何なものかと私も身にしみています。台風十九号の風の
直撃を受けた伊豆の家は、未だ修理できていません。手が足りないとのこと。

俳句は、自然を詠み心を語るものです。

生活の中の自然。観光地の姿も貴重ですが、自分なりの眼を養いましょう。

句材は意外に近い処にも、きつとあるはずと思います。

母 在 さ ば 灯 点 す 頃 よ 白 芙 蓉 杉田智榮子

やはり季語の「白芙蓉」が眼目であろう。

作者の母への想いが伝わる。直接お話ししていないが、投句を見て、看護の生活が
うかがわれた。亡くなられてから一年近く、静かな表現の中に心が溶む。この句はそ
の成果。

僧 院 の 丘 や 葡 萄 の 枯 深 み 小林 昌子

鍛錬会での多治見の修道院の景。鍛錬会の意味は、当日の勉強は勿論、そこで学ん
だ事の反芻、見直しであろう。

全国の修道院にワインを配るといふ広大な葡萄園は、訪れた時には摘み終った後で
あったが、下五の「枯深み」がああ情景を甦らせる。僧院というと、若い頃読んだス

任せるといふも力や雁わたる 西川 麻規

タンダールの『バルムの僧院』が浮かぶ。信仰のない私には修道院は未知の存在で、想像あまりある処だったが、多治見の僧院を見て、素朴ながら開放的な佇まいに目が開かれた。なぜ此の地に、と思うと共に多治見という地の魅力が思われる。

この季語は、直接的でないだけに効く。
人に任せられず自分が無理してしまう方もいらっしやるだろう。なぜ雁は棹となつて渡るのか。一羽では渡れなくても、皆で協力してこそその渡り。先頭の順は度々変わるという。仲間のいる事の力、そう思う。

母の膝取り合うてをり松ぼくり 若見 洋子

懐かしい景色。五歳ぐらい迄の子供は、何がなくとも母が一番。いくら父が頑張っても「ママ」と母を探す。

この句は季語の「松ぼくり」を、よく見つけられたと思う。離れているようで近くもあるこの距離感。同じ四句欄に多田淑子氏の〈膝に来る子より小春の匂ひかな〉がある。子や孫の一番可愛かった頃、あの頃は私の膝にもものつてきて来れたなあ。

白己流といふやすらかさ毛糸編む 恩田 洋子

私も毛糸編みを習っていたので、まず始めのゲージ（目数）作りから、型紙等々正直面倒だった。いくらゲージをとつても、その時の気分できつくも緩くもなつて、とても計算通りには出来ず、せっかく完成してもグズグズだった。編物には人の性格が出てしまう。「自己流」という言葉にまとめられたが、この自由の意味は私にも響く。